

乳児の養育者と共に考える子育て支援プログラムの評価 —参加型アクションリサーチ—

岩國 亜紀子¹⁾ 槻木 直子¹⁾ 菅野 峰子²⁾ 大前 燿子²⁾ 酒井 淑子²⁾
 武田 穂奈美²⁾ 坂田 明子²⁾ 寺嶋 智穂²⁾ 濱野 由起²⁾ 仲田 敦子²⁾
 黒島 華恵²⁾ 川村 桃子²⁾ 川西 貴志²⁾ 松本 奈美²⁾ 岡邑 和子³⁾
 川下 菜穂子³⁾ 赤松 恵美⁴⁾ 工藤 美子³⁾ 山本 あい子⁵⁾

要 旨

【目的】参加型アクションリサーチ法を用いて、乳児を育てる養育者と看護職が協同して子育て支援プログラムを開発・実施・評価することで、養育者のニーズに応じる子育て支援を明らかにする。

【方法】①解決を要する乳児の養育者の課題の発見と分析、②解決のためのプログラム開発、③プログラムの実施、④プログラムの評価の4段階を2クール実施した。1クール目でプログラム案の、2クール目で評価に基づいて修正したプログラムの開発、実施、評価を行った。データは、①、②、④で実施したフォーカスグループインタビュー内容の逐語録であり、養育者のニーズに応じた子育て支援の場に求められる要素と、養育者に見られる反応の視点で分析した。本研究は研究者所属施設研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】研究協力者は54名であった。Iクール目で挙げた【子育てをする自らの体験を話したい、夫や子どもと出掛けて楽しみたい】等のニーズに基づき、「養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場、親子で遊べる場」の要素を含めたプログラム案を実施した。養育者の反応としては、【集中して話すことによるストレス発散・気分転換、気がかりに対する解決策】等と、相談に対して医療者から明確な回答が欲しい、発達に合わせた遊びを工夫する等の改善要望があった。IIクール目では改善要望等を踏まえてプログラム案を修正し、「養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場、親子で遊べる場、養育者と看護職が妊婦の相談に応じる場」の要素を含めたプログラムを実施した。養育者の反応としては【看護職や養育者同志から求める知識や技を得た、自らの育児を省みてエンパワーされた、育児の捉え方が変わった】などが挙げられた。

【結論】養育者自身の視点を含めた子育て支援プログラムを提供することで養育者は、子育てに関する知識、技術、エンパワーを得て、育児の捉え方が変わっていた。

キーワード：乳児、養育者、子育て、参加型アクションリサーチ、看護

1) 兵庫県立大学地域ケア開発研究所 周産期ケア研究センター
 2) 兵庫県立尼崎総合医療センター
 3) 兵庫県立大学看護学部母性看護学
 4) 高知大学医学部看護学科
 5) 兵庫県立大学地域ケア開発研究所

I. 研究背景

少子化が深刻な問題となっている中、2003年には次世代育成支援対策推進法が成立し、市町では子育て支援をはじめとした次世代育成支援対策の実施に関する計画策定が義務付けられている。関西圏域の中核都市である尼崎市においても、2005年にわいわいキッズプランあまがさが策定され¹⁾、人々が安心して生み育てることを支援する環境づくりが行われている。尼崎市において在宅で子育てしている割合は、0歳児98.3%、1歳77.4%、2歳72.0%、3歳52.0%である²⁾。在宅で子育てしている割合の高い3歳未満の保護者を対象に尼崎市が行った調査によると、子育てに関する悩み・気になることについては、「自分の自由な時間が持てない38.6%、子育てやしつけがうまくできていないという不安がある32.3%、子育てにかかる出費がかさむ27.8%、」等が挙げられていた²⁾。しかし、「子育てやしつけがうまくできていないという不安がある」などの具体的内容は明らかになっていない。

地域において、保健所、保健センターを中心とした子育て支援が多く行われる中、医療機関も地域のリソースの一つと考えられる。実際に医療機関で提供されている子育て支援には、母親同士の情報交換や仲間作りの場の提供^{3) 4)}、専門家による育児の知識提供³⁾、母乳を含む様々な相談に応じる電話相談窓口の設置⁵⁾等がある。医療機関で行われる子育て支援の特徴として、多様な専門家による支援が同時に行い得ることや、妊娠・入院中に関わった顔見知りのスタッフが対応することで安心感が生じやすいこと^{4) 5)}等が挙げられている。しかし、実際に提供されている支援が当事者である養育者のニーズに応じたものであるかは養育者の視点から十分に検討されていない。

当事者である養育者の声を聞きながら子育て支援の改善・向上を図るための研究手法として、アクションリサーチがある。これは、米国社会心理学者Levinが提唱した方法である。アクションリサーチの1つである参加型アクションリサーチ (Participatory action research) は、問題の定義、アプローチや研究方法の選択、データの分析、研究結果の利用について、研究者と参加者が協同するものである⁶⁾。計画、行為、観察、

内省という螺旋的サイクルが互いに重なり合いながら流動的、開放的、即興的に展開するものであり⁷⁾、問題解決にとどまらず、ひとつのコミュニティに属する人々の力を集結させ、エンパワメントにつなげていくことに意義がある⁸⁾。これより、参加型アクションリサーチの手法を用いることで、当事者である養育者と看護職が協同し、養育者自身の視点を含めて養育者の求めることとそれに応じる子育て支援のありようを研究的に明らかにできる可能性がある。

II. 研究目的

参加型アクションリサーチの手法を用いて、乳児を育てる養育者と看護職が協同し、養育者自身の視点を含めて養育者の困っていることや求める子育て支援を明らかにし、それに基づいて開発・実施した子育て支援プログラムを養育者の視点で評価することで、養育者のニーズに応じる子育て支援を明らかにする

III. 研究方法

1. 研究デザイン

乳児を育てる養育者と看護職の協同による参加型アクションリサーチ

2. 調査期間

平成26年6月～平成28年2月

3. 研究プロセス

Levinが提唱したアクションリサーチは、その後も複数の研究者によって展開され、いくつかの構造が提示されている。Kemmis et al. は、アクションリサーチは、計画 (planning)、行動 (acting)、観察 (observing)、リフレクション (reflecting)、再計画 (re-planning) という5段階で構成されており、この一連のプロセスは循環的に続くものであるとその構造を示している⁹⁾。また、冷水らは、アクションリサーチは、課題解決のためのアクション (解決策の実行) が研究の中核となると位置付け、「①特定コミュニティで解決を要する課題の発見と分析、②解決のための方策の計画と体制づくり、

③計画に即した解決策の実行、④解決策実行の過程と結果の評価」の4段階で構成されていると示している¹⁰⁾。

以上を踏まえ、本研究の研究プロセスは、図1とした。ここでは、計画、実施、評価までの一連の過程を「①解決を要する乳児の養育者の課題の発見と分析、②解決のためのプログラムの開発、③計画に即したプログラムの実施、④プログラム実施の過程と結果の評価」の4つの段階で構成されるものと位置づけた。また、一連の過程は、単独で終わらず螺旋的に展開するものであることを示すため、子育てプログラム案の開発、実施、評価（Iクール目）と、それを修正した修正版子育てプロ

グラムの開発、実施、評価（IIクール目）の2クール展開することと位置づけた。

4. 研究者及び研究協力者

研究者（看護職）と研究協力者（乳児を育てる養育者）の役割は、表1に示す。それぞれのリクルートは下記の通り行った。

1) 研究者のリクルート

研究者は、兵庫県内第二次医療施設に所属する助産師6名（平成26年6名、平成27年4名）、小児看護師6名（平成26年4名、平成27年6名）、更に兵庫県内の研究

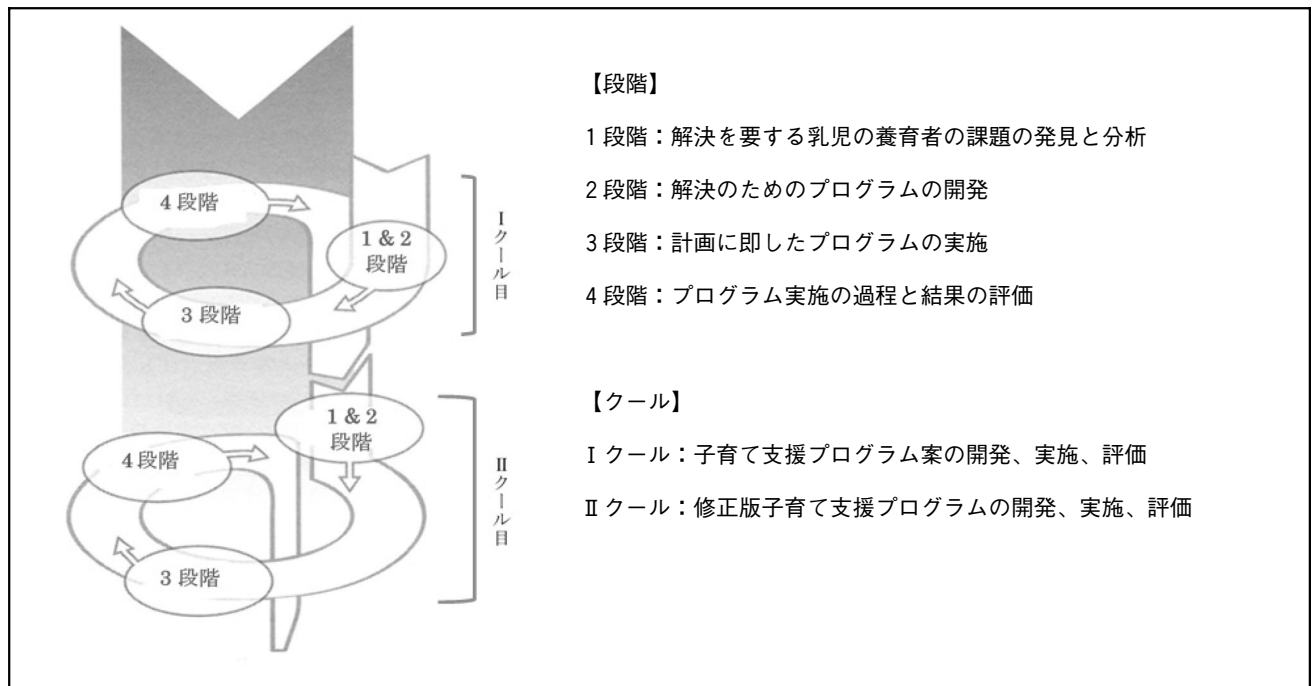


図1 研究プロセス

表1 研究段階別研究者及び研究協力者の役割

研究段階	研究計画	調査				結果分析
		I		II		
		1・2	3・4	1・2	3・4	
研究者	○	○	○	○	○	○
研究協力者	第一期	—	○	○	—	—
	第二期	—	—	○	—	—
	第三期	—	—	—	○	—
	第四期	—	—	—	—	○

【調査段階】 1：解決を要する乳児の養育者の課題の発見と分析
 2：解決のためのプログラムの開発
 3：計画に即したプログラムの実施
 4：プログラム実施の過程と結果の評価

所や看護学部にも所属する母性看護研究者7名（平成26年5名、平成27年7名）の合計19名（平成26年度15名、平成27年度17名）であった。

医療施設の助産師及び小児看護師から研究者をリクルートするため、医療施設における副院長兼看護部長の了承を得た上で、研究者は、産科病棟や小児科外来における会議等で文書を用いて研究概要を説明した。強制力が働かないよう、研究参加希望者からの連絡は研究者が直接受けた。

2) 研究協力者のリクルート

本研究では、関西圏域の中核都市である尼崎市で乳児を育てる養育者のニーズに応じた子育て支援を明らかにすることを目的としていた。乳児の月齢により養育者のニーズが異なる可能性があることを考慮して、1～3ヶ月程度の乳児の養育者が多く集まる尼崎市内の産科外来や小児科外来、更に3ヶ月以降の乳児と養育者が多く集まる尼崎市内の子育て支援施設にてリクルートを行った。

2年間に渡る本研究では、研究開始時に乳児の養育者であったものは幼児の養育者になり求めるニーズが異なってくる可能性があること、プログラムを開発する調査段階1・2に必要な研究協力者数とプログラムを評価する調査段階3・4に必要な研究協力者数は異なることから4種類の研究協力者を設定した。第一期研究協力者は、研究者と共に、乳児を育てる養育者が困っていることや求める子育て支援を明らかにして（調査段階I-1）子育て支援プログラム案を開発すること（調査段階I-2）、研究者が実施する子育て支援プログラム案に参加し（調査段階I-3）、それを評価する（調査段階I-4）こと、更に翌年度も乳児を育てる養育者が困っていることや求める子育て支援を明らかにしながら（調査段階II-1）、子育て支援プログラム案を修正して修正版子育て支援プログラムを開発すること（調査段階II-2）への協力に同意する基本健康な乳児の父母5名程度とした。第二期研究協力者は、調査段階I-3、I-4、II-1、II-2への協力に同意する基本健康な乳児の父母20名程度とした。第三期研究協力者は、調査段階II-1、II-2に加えて、研究者が実施する修正版子育て支援プログラムに参加し（調査段階II-3）、それを

評価する（調査段階II-4）ことへの協力に同意する基本健康な乳児の父母5名程度とした。第四期研究協力者は、調査段階II-3、II-4への協力に同意する基本健康な乳児の父母20名程度とした。

5. 調査内容

調査内容は、調査段階別に下記の通り設定した。フォーカスグループインタビュー（FGI）では、乳児を育てる養育者が困っていることや求める支援に関して、潜在的な思いやそれらに含有される価値を表出・共有し、具体的な実践（子育て支援プログラム）を見出すことを目指した。

1) 調査段階I-1及びI-2

第一期研究協力者と研究者がFGIを行い、「養育者が困っていること、求める支援、子育て支援プログラム案の具体的内容・方法」等について話し合った。

2) 調査段階I-3

調査段階I-2段階までに開発された子育て支援プログラム案を研究者が実施し、第一期・第二期研究協力者が参加した。

3) 調査段階I-4

調査段階I-3段階で実施した子育て支援プログラム案に参加した第一期・第二期研究協力者と研究者がFGIを行い、「プログラム案に参加してどのように感じたか、どのように修正したら良いか」等について話し合った。

4) 調査段階II-1及びII-2

第一期、第二期、第三期研究協力者がFGIを行い、「養育者が困っていること、求める支援、子育て支援プログラム案の具体的内容・方法」等について話し合った。

5) 調査段階II-3

調査段階II-2段階までに開発された修正版子育て支援プログラムを研究者が実施し、第三期・第四期研究協力者が参加した。

6) 調査段階Ⅱ-4

調査段階Ⅱ-3段階で実施した修正版子育て支援プログラムに参加した第三期・第四期研究協力者と研究者がFGIを行い、「プログラム案に参加してどのように感じたか、どのように修正したら良いか」等について話し合った。

6. 分析方法

研究協力者と研究者がFGIで語る内容は、許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録より、養育者のニーズに応じた子育て支援の場に求められる要素、養育者に見られる反応に関する内容を抽出した。内容を代表するコードを抽出し、コードを比較しながら、語られた意味に配慮して共通するコードをまとめカテゴリー化した。

7. 倫理的配慮

兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会及び、兵庫県立尼崎総合医療センター研究倫理委員会の承認を得た。加えて、乳児の養育者に研究を依頼する際は、まず研究者以外のスタッフに研究者から研究説明を聞くことの可否を確認して貰い、了承の得られた養育者に研究者が文書を用いて、研究の目的、方法、更に研究協力は自由意思であること、個人情報保護などの説明を行い、同意を得た。

IV. 結 果

1. 研究協力者の概要

研究協力者数は、54名であった。第一期研究協力者は6名、第二期研究協力者17名、第三期研究協力者4名、

第四期研究協力者27名であった(表2)。

2. 調査Ⅰ(子育て支援プログラム案の開発、実施、評価)

調査Ⅰは、下記4段階に沿って行った(表3)。

1) 調査段階Ⅰ-1、Ⅰ-2

第一期研究協力者6名、研究者15名は、3回に渡ってFGIを行うこととなり、各回には研究協力者5、6名、研究者6-10名ずつが参加した。FGIでは、困っていること、求める支援、子育て支援プログラム案の具体的内容・方法等について話し合われた。

養育者が困っていること、求める支援としては、2のカテゴリー、9のサブカテゴリー、22のコードが抽出された(表4)。以下カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、コードを「 」で示し説明する。【子育てをする自らの体験を話したい】は、<たまには子と離れたい>、<会話することで救われる>、<共感して欲しい>、<些細なことを気軽に相談したい>、<育児体験者から“大丈夫”な範囲を聞きたい>、<専門家の正しい意見を聞きたい>から構成されていた。【夫や子どもと出掛けて楽しみたい】は、<出掛けられる場がない>、<親子で楽しみたい>、<夫にも自分と同じように子どもに関わって欲しい>から構成されていた。これらを踏まえて、《Ⅰ-A:養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場『ワイワイお話ししましょう』、Ⅰ-B:親子で遊べる場『お子さんと一緒に遊びましょう』》の要素を含めた2種類の子育て支援プログラム案を実施することとし、各プログラムの広報、予約、対象、日時、内容等詳細についても研究協力者と共に検討した(表5)。

表2 研究協力者の基本属性 (n=54)

研究協力者	第一期	第二期	第三期	第四期
養育者の総数	6	17	4	27
母親 初産婦	5	12	1	14
養育者別人数 経産婦	1	1	2	4
父親	0	4	1	9
養育者の年齢	33.29±8.46		34.37±4.68	
子どもの月齢	4.05±1.72		5.57±2.77	

*子どもの月齢は、初回参加時の月齢で算出

表3 調査I及びIIの概要

調査段階	日程	調査項目		調査内容	時間 (分)	参加人数		
		研究協力者と研究者	研究者打ち合わせ 事前事後			研究者	協力者	
I	26年度	FGI I-①	○	-	90	6	10	
	8月			「自己紹介、養育者が困っていること」について話し合うFGI				
	1 & 2	9月	FGI I-②	○	○	90	5	6
			FGI I-③	○	○	90	5	9
3	10月	プログラム I-A	○	○	120	16	9	
	11月	プログラム I-B	○	○	120	13	8	
4	12月	FGI I-④	○	○	90	13	9	
					30	3	2	
II	27年度	FGI II-①	○	○	100	10	8	
	8月							
	1 & 2	9月	FGI II-②	○	○	100	5	7
		10月	プログラム II-A	○	○	120	8	8
3	11月	プログラム II-B	○	○	120	14	6	
	12月	プログラム II-C	○	○	120	11	6	
4	1月	プログラム II-D	○	○	120	24	9	
	2月	FGI II-③	○	○	90	12	9	

【調査段階】 1：解決を要する乳児の養育者の課題の発見と分析

2：解決のためのプログラムの開発

3：計画に即したプログラムの実施

4：プログラム実施の過程と結果の評価

表4 調査I：養育者が困っていること及び求める支援

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子育てをする自らの体験を話したい	たまには子と離れたい	子どもと一緒にいると自分の思いを共有できない
	会話することで救われる	愚痴をオープンに言える場があるだけで荷が下りる 言える場があるといい
	共感して欲しい	共感して欲しい 共感し合えるとすごく楽になったと感じる
	些細なことを気軽に相談したい	電話相談はハードルが高く重症でないといけない 些細なことは気軽に相談しにくい
	育児体験者から“大丈夫”な範囲を聞きたい	どこまで気を付けたらいいのかわからない 経産婦にこのくらいは大丈夫と聞くと安心する
	専門家の正しい意見を聞きたい	困ったことはないかと声を掛けて貰えると相談しやすい わざわざ相談に行くほどではないけど専門家に聞いてみたい プロとしての意見で安心する
	夫や子どもと出掛けて楽しみたい	出掛けられる場がない
親子で楽しみたい		子どもと一緒に何かしたい 家にいてもしょうがない 子どもが喜ぶおもちゃを作りたい
夫にも自分と同じように子どもに関わって欲しい		夫が子どもへの関わり方を知りたい 夫が父親の集まりに参加させる方法を知りたい 夫が情報を得られる場が欲しい 男性は話し合いより子どもと何かをする方が参加しやすい

表5 調査I：子育て支援プログラム案の概要

項目	内容
広報	・市内子育て支援の場に案内文を設置する ・父親が参加しやすいよう案内文に「パパの参加もお待ちしています」と記載する ・養育者同士の口コミで広げて貰う
予約	・代表者にメール予約する方法が手間がなく良い
対象	・会場の大きさ（60名定員）から約20名が丁度良い ・初産婦に限定されたプログラムが多いが、育児経験談を聞けるよう、対象は初産に限定しない ・子どもの月齢が近い方が親近感はあるが、月齢が離れていると月齢が異なる子どもの様子を聞くことが出来るので月齢で対象を限定しない
日時	・父親が参加しやすいよう土日に開催する ・2時間ぐらいがちょうどよい
名前シール	・互いに声を掛けやすいよう、養育者の名前シールに「名前、子どもの月齢、子どもの性別」を記載して貰う
内容	I-A：養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場「ワイワイお話ししましょう」 ①グループ毎に自己紹介 ②グループ毎に参加申込時に挙げた「困っていること」等話し合う（看護職がファシリテーター役となる） ③グループ間で話し合い内容を共有 ④終了後に個別相談を受ける *初対面でも話しやすいよう4人ずつの4グループ *育児体験者の体験が聞けるよう、各グループに経産婦を万遍なく分ける *話しやすいようマットに座る *希望にて、別会場で託児を行う I-B：親子で遊べる場「お子さんと一緒に遊みましょう」 ①廃材を用いたおもちゃ作り（廃材は養育者からも集め、おもちゃは持ち帰り可とする） ②ベビーマッサージ（脱衣を嫌がる子もいるので着衣のまま行う） ③絵本読み聞かせ

表6 調査I：子育て支援プログラム案の評価

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
プログラムで得たもの	集中して話すことによるストレス発散、気分転換	ゆっくり話がしたい	
		知らない人と話すのは楽しい	
		他の人に言って発散するのは大事	
		子育て中は交友関係が減ってストレス	
		子どもとずっと一緒だとリフレッシュできない	
	話をしてリフレッシュできた		
	悩みを話すきっかけ	悩みを引き出してくれる場は少ない	
	悩みを共有したり共感を得たりする満足感	いろんな悩みを共有できて良かった	
		同じ悩みを抱えている人同士で話をしてスッキリした	
	気がかりに対する解決策	育児経験者からのアドバイスは参考になる	
		専門家の具体的なアドバイスはやってみようと思える	
		専門家の具体的なアドバイスは安心する	
専門家と育児経験者に聞きたいことは違うので両方必要			
家族で楽しさを共有できたという体験	おもちゃ作りは家ではできない		
	みんなと共有しながら楽しめるのはすごくいい		
子どもの反応が得られた喜び	父親が作ったおもちゃで子どもが喜んで遊ぶと、父親が喜ぶので嬉しい		
プログラムの改善への要望	子どもの反応が得られた喜び	子どもが家でも手作りおもちゃで遊んでくれて嬉しい	
	専門家からの具体的なアドバイスが欲しい	専門家の具体的なアンサーがほしい 専門家に相談できる場は少ない	
	顔見知りでない人とも会話したい	顔見知りだと普段と同じ話になってしまう 話したことがない人の意見も聞きたい	
	もっと遊ぶ機会が欲しい	他の親と話すきっかけが欲しい 作ったおもちゃで遊ぶ時間があると良い	
	発達に合わせた遊びを知りたい	子どもの成長に合った遊びがあると良い 発達へのアドバイスがあると良い	
	父親も含め家族で楽しみたい	夫婦で参加すると子どもがぐずった時に対応できる 夫婦で参加すると楽しめる	
	新たなプログラムへの希望	妊娠中から情報を得る場が欲しい	妊娠中に経験者の意見が聞きたかった 母親学級は育児経験者が少なく体験を聞けない 育児経験者から話が聞けたら安心
		妊娠中から父親を育児に巻き込む場が欲しい	夫は何をしていいかわからない
			夫に教えてと言われる 夫に教えるのは大変

2) 調査段階 I - 3

第一期研究協力者6名、第二期研究協力者17名、研究者15名の内、研究者8、9名ずつが子育て支援プログラム案I-AとI-B(表5)を実施し、研究協力者13-16名ずつがそれぞれに参加した。

3) 調査段階 I - 4

第一期研究協力者6名、第二期研究協力者17名、研究者15名の内、子育て支援プログラム案I-AとI-Bを振り返り評価するFGIに集まったのは研究協力者13名、

研究者9名であった。研究協力者13名の内子育て支援プログラム案I-AとI-Bの両方に参加したものは6名、いずれか一方に参加したものは7名であった。

研究協力者との評価では、3のカテゴリー、13のサブカテゴリー、33のコードが抽出された(表6)。先ず【プログラムで得たもの】としては、<集中して話すことによるストレス発散、気分転換>、<悩みを話すきっかけ>、<悩みを共有したり共感を得たりする満足感>、<気がかりに対する解決策>、<家族で楽しさを共有できたという体験>、<子どもの反応が得られた喜

び>などがあった。【プログラムの改善への要望】としては、<専門家からの具体的なアドバイスが欲しい>、<顔見知りでない人とも会話したい>、<もっと遊ぶ時間が欲しい>、<発達に合わせた遊びを知りたい>、<父親も含め家族で楽しみたい>などがあった。最後に、【新たなプログラムへの希望】として、<妊娠中から情報を得る場が欲しい>、<妊娠中から父親を育児に巻き込む場が欲しい>などが挙がり、妊娠中から妊婦とそのパートナーが育児の情報を得られる場が求められていた。

3. 調査Ⅱ（修正版子育て支援プログラムの開発、実施、評価）

調査Ⅱは、下記4段階に沿って行った（表3）。

1) 調査段階Ⅱ-1、Ⅱ-2

第一期研究協力者6名、第二期研究協力者17名、第三期研究協力者4名、研究者17名は、2回に渡ってFGIを行うこととなり、各回には研究協力者5-10名、研究者7、8名ずつが参加した。FGIでは、困っていること、求める支援、子育て支援プログラム案の評価、修正版子育て支援プログラムの具体的な内容・方法等について話し合われた。FGIの結果、「子育て支援プログラム案への改善要望などを踏まえて、《Ⅱ-A：養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場『ワイワイお話ししましょう』、Ⅱ-B：親子で遊べる場『お子さんと一緒に遊びましょう①』、Ⅱ-C：養育者と看護職が妊婦の相談に応じる場『教えて先輩ママ・パパ!』、Ⅱ-D：親子で遊べる場『お子さんと一緒に遊びましょう②』》の要素を含めた4種類の修正版子育て支援プログラムを実施することとし、各プログラムの広報、予約、対象、日時、内容等詳細についても研究協力者と共に検討した（表7）。

2) 調査段階Ⅱ-3

第三期研究協力者4名、第四期研究協力者27名、研究者17名の内、研究者6-9名ずつが修正版子育て支援プログラムⅡ-A、Ⅱ-B、Ⅱ-C、Ⅱ-D（表7）を実施し、研究協力者8-24名ずつがそれぞれに参加した。

3) 調査段階Ⅱ-4

(1) 修正版子育て支援プログラムの評価

第三期研究協力者4名、第四期研究協力者27名、研究者17名の内、修正版子育て支援プログラムⅡ-A、Ⅱ-B、Ⅱ-C、Ⅱ-Dを振り返り評価するFGIに集まったのは研究協力者12名、研究者9名であった。研究協力者12名の内、修正版子育て支援プログラムに4回参加したものは4名、3回参加したものは3名、2回参加したものは3名、1回参加したものは2名であった。

修正版子育て支援プログラムの評価では、3の категория、10のサブカテゴリー、37のコードが抽出された（表8）。まず【看護職や養育者同志から求める知識や技が得られた】に関しては、<悩みの解決につながる対処法を知れた>、<正確な情報が得られた>、<育児体験者の生きた体験から学べた>、<子どもに関わる手段が増えた>、<父親は子どもと関わる技を知りたい>、<相談しやすい場が整えられている>、<知識や情報が欲しい>などがあった。【自らの育児を省みてエンパワーされた】に関しては、<質問を受ける立場になり成長を実感できた>、<自分の育児、家事を前向きに捉えられるようになった>などがあった。最後に【育児の捉え方が変わった】に関しては、「育児の役割を果たしている安心感が生まれた」、「子どもの泣きに集中しなくなった」があった。

(2) プログラム案の開発段階から評価までに携わった研究協力者の反応

第一期研究協力者6名、研究者15名の内、子育て支援プログラム案を開発、実施、評価したプロセスを振り返り評価するFGIに集まったのは研究協力者3名、研究者2名であった。プロセスの評価では、3の категория、7のサブカテゴリー、14のコードが抽出された（表9）。まず【日常生活に改善が見られた】には、<交友関係が広がった>、<日常生活の中に予定が出来て動きやすい>があった。【自らの能力に気付く機会になった】には、<職業の専門性を見つめなおす機会になった>、<役に立てた自信が湧く>、<達成感が得られた>があった。【育児の多様性を学べた】では、<異なる観点を学べた>、<多くの課題があることに気付いた>があった。

表7 調査Ⅱ：修正版子育て支援プログラムの概要

項目	内容
広報	・父親が参加しやすいよう、案内文には父親も主役であること示す（注意書き「パパも参加可能」ではなく、副題「パパもワイワイおしゃべり」に加える）
予約	調査Ⅰ子育て支援プログラム案と同様（改善の必要なし）
対象	〃
日時	〃
名前シール	〃
内容	<p>Ⅱ-A：養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場「ワイワイお話ししましょう～パパもワイワイおしゃべり～」</p> <p>【調査ⅠプログラムⅠ-Aの修正】プログラⅠ-Aを下記の通り修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顔見知り同士でのグループは代わり映えがないので可能な限り初対面同志でのグループ編成とする。養育者の悩みは月齢毎に異なるため、3か月毎にグループ分けをする。 ・具体的なアドバイスが提供できるよう子育て経験のある看護職とない看護職、母性看護職と小児看護職がペアになってファシリテーターを担う。父親グループのファシリテーターは育児経験のある男性看護職とする。 ・参加申込時と参加時では悩みが変わっているため、申込時に「困っていること」は挙げない。自己紹介の際に、養育者に「困っていること」を挙げて貰い、優先的に話す内容をグループ内で選び順番に話す。 ・育児を頑張っていることを褒められると、嬉しく励みになるので、最後に互いを認め合い褒め合う「褒め合いゲーム」を加える。
	<p>Ⅱ-B親子で遊べる場「お子さんと一緒に遊みましょう①」</p> <p>【調査ⅠプログラムⅠ-Bの修正】プログラⅠ-Bを下記の通り修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラムⅠ-Bの内容に、養育者同志で話しをする「自己紹介ゲーム」を加える。
	<p>Ⅱ-C養育者と看護職が妊婦の相談に応じる場「教えて先輩ママ・パパ！～パパもワイワイおしゃべり～」</p> <p>【調査ⅠプログラムⅠ-Aの改変】プログラⅠ-Aを下記の通り改変し新プログラム作成</p> <ol style="list-style-type: none"> ①グループ毎に自己紹介 ②グループ毎に妊婦が参加申込時に挙げた「育児経験者や看護職に聞きたいこと」等話し合う（看護職がファシリテーター役となる） ③グループ間で話し合い内容を共有 ④終了後に個別相談を受ける <p>*初対面でも話しやすいよう4人ずつの4グループ</p> <p>*希望にて、別会場で託児を行う</p> <p>*父親グループのファシリテーターは育児経験のある男性看護職とする</p>
	<p>Ⅱ-D親子で遊べる場「お子さんと一緒に遊みましょう②」</p> <p>【調査ⅠプログラムⅠ-Bの改変】プログラⅠ-Bを下記の通り改変し新プログラム作成</p> <ol style="list-style-type: none"> ①自己紹介ゲーム ②子どもの発達に応じた遊び（音楽に合わせた遊びとベビーマッサージなど対象に合わせて選択できるよう複数を準備する） <p>*動き回る前の月齢の子が危険でないように、月齢毎に遊ぶ場を設定する</p>

表8 調査Ⅱ：修正版子育て支援プログラムの評価

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
看護職や養育者同志から求める知識や技が得られた	悩みの解決につながる対処法を知れた	改善につながる対処法を知れた	
		今後使えそうな対処法を知れた	
		悩みが解決した	
		悩みが短時間に解決する	
		悩みが解決されて安心した	
		悩みに気づける	
	正確な情報が得られた	良かった対処法を他者に伝える	
		医師からの情報が得られる	
		専門知識の高い看護職の情報が得られる	
	育児体験者の生きた体験から学べた	病院で行われている	
		最新の情報に基づいている	
	看護職や養育者同志から求める知識や技が得られた	育児体験者の生きた体験から学べた	体験者の生の声が直接聞けたので試した
			気楽に生きた情報が得られる
		子どもに関わる手段が増えた	同じ立場の人と語る必要性に気づく
			子どもに触れ合う機会が増えた
			作ったおもちゃで遊んでいる
			年齢に応じた遊びがあることがわかった
		子どもに関わる手段が増えた	生活に取り入れて行っている
			手作りおもちゃは喜ばれると気づき作り始める
			手作りおもちゃは喜ばれると気づき作り始める
おもちゃの遊び方が変わったことから子どもの成長を感じる			
父親は子どもと関わる技を知りたい	作ったおもちゃで遊んでいる		
	子どもと関わる方法がわかった		
相談しやすい場が整えられている	父親は子どもと接する方法を知りたい		
	父親に出来ることを知りたい		
	直接顔を見て話すとスッキリする		
知識や情報が欲しい	子どもと離れ、話に集中できる		
	助産師や先輩養育者がいる環境では質問しやすい		
	子どもの月齢に応じた情報が欲しい		
自らの育児を省みてエンパワーされた	質問を受ける立場になり成長を実感できた	季節に応じた情報が欲しい	
		他のグループの話し合い内容が共有出来て良かった	
	自分の育児、家事を前向きに捉えられるようになった	妊婦からの質問を受けて自分が成長していることを実感できた	
		質問を受けて子どもの成長を実感できた	
育児の捉え方が変わった	育児の捉え方が変わった	頑張りを認めて貰えた	
		他者の体験を聞いて育児への意識が変わった	
		育児の役割を果たせている安心感が生まれた	
		子どもの泣きに集中しなくなった	

表9 子育て支援プログラムの開発から評価までに携わった研究協力者の反応

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
日常生活に改善が見られた	交友関係が広がった	交友関係が広がりしゃべれる友達が増えた 顔見知りでないお母さんから率直な意見が聞けてよかった
	日常生活の中に予定が出来て動きやすい	日常生活の中に時間が決められた予定があることは重要 子育ては終わりががないので時間を決められてないとだらだらしてしまう
		結構時間を決められているほうが動きやすい
自らの能力に気付く機会になった	職業の専門性を見つめなおす機会になった	保育士の仕事に自信を持てることはなかったが、専門的な仕事してたんだと気付いた 保育士の仕事は頑張ってやってたと見詰め直す機会になった
	役に立てた自信が湧く	自分が役に立てた自信になる 力のない自分でも最後には形になる機会に携われた
	達成感が得られた	自分の意見がプログラムとかの参考になり達成感がある 研究の手伝いができて達成感がある
育児の多様性を学べた	異なる観点を学べた	人が増えると違う観点からの解決法を学べる 人が変わると偏らない意見になるのでいい
	多くの課題があることに気付いた	同じ月齢でも多くの課題や問題があることを知れた

V. 考 察

本研究では、参加型アクションリサーチの手法を用いて、乳児を育てる養育者と看護職が協同し、子育て支援プログラムの開発、実施、評価までの過程を2回繰り返して子育て支援プログラムを修正し、養育者のニーズに応じる子育て支援を明らかにした。そこで、下記2点について考察し今後の課題について述べる。

1. 乳児の養育者のニーズに応じる子育て支援

これまでにも看護職等が提供する子育て支援の場への反応⁴⁾は明らかになっており、更に、養育者と共に作成した教育プログラムによるストレスへの効果¹¹⁾も検証されている。しかし、育児の当事者である養育者のニーズに基づいて開発した子育て支援プログラムを養育者の視点から評価して修正するアクションはこれまでに行われていない。

本研究では、当事者である乳児を育てる養育者のニーズ「子育てをする自らの体験を話したい」、「夫や子どもと出掛けて楽しみたい」に基づき、初年度には①養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場と、②親子で遊べる場の要素を含めた子育て支援プログラム案を提供して養育者と共に評価した。養育者のニーズに基づいたプログラムであったことから、参加した養

育者からは、「集中して話すことによるストレス発散・気分転換、悩みを共有したり共感を得たりする満足感、家族で楽しさを共有できたという体験」など肯定的な反応が得られており、初年度より満足度の高い子育て支援プログラム案を開発することが出来ていた。一方、養育者からは、「専門家からの具体的なアドバイスが欲しい、顔見知りでない人とも会話したい、発達に合わせた遊びを知りたい」など改善への要望が挙がっていた。中核都市である尼崎市では、既に、ママやパパのためのマタニティセミナーや育児支援専門員派遣事業、こんにちは赤ちゃん事業など¹⁾、人々が安心して生み育てることを支援する環境づくりが行われていたが、尼崎市で乳児を育てる養育者には更に様々なニーズがあることが明らかになった。調査I-4で挙げた養育者からの改善への要望を具体的に見ていくと、養育者からは「専門家からの具体的なアドバイスが欲しい」、「顔見知りでない人とも会話したい」などが挙がっており、これは、調査I-1、I-2で挙げた養育者のニーズ「子育てをする自らの体験を話したい」が、単に育児体験者や専門家に体験を話すことではなく、特にこれまで体験を話し合ったことのない“顔見知りでない育児体験者”と体験を共有して様々な子育てのありようを知ることや、看護職など専門家から自らの疑問に対する具体的なアドバイスを気軽に得られることを求めていることを示している

と考えられた。また、調査 I-4 では「発達に合わせた遊びを知りたい」なども挙がっており、これは、調査 I-1、I-2 で挙げた「夫や子どもと出掛けて楽しみたい」が、単に親子で遊ぶ場ではなく、月齢によって興味や行動が大きく異なる中で“我が子の発達”に合った遊びを知ることを求めている、すなわち養育者は我が子の発達に応じた関わりをしたいと求めていることを示していると考えられた。

そこで、翌年度は、顔見知りでない人と会話しやすいよう、プログラム①は可能な限り初対面同志でのグループ編成とし、プログラム②では養育者同志で話す機会（自己紹介ゲーム）を加えた。ファシリテーターを担う看護職の専門分野によってアドバイスできる質問に偏りが見られないよう、プログラム①では、子育て経験のある看護職とない看護職及び、母性看護職と小児看護職がペアになってファシリテーターを担うよう修正した。加えてプログラム②では、わが子の発達に合わせた遊びを選択できるよう複数の遊びを準備するよう修正した。このように、子育て支援プログラム案の評価から修正版子育て支援プログラムの開発へと 2 クールに渡るアクションを養育者と共に展開したことで、乳児の養育者が求めていることがより具体的に明らかになり、より養育者のニーズに応じる子育て支援プログラムへ修正することが出来た。

2. プログラムの開発から携わったことでの養育者のエンパワメント

当事者である養育者と共に子育て支援プログラムを開発したことで、先述したように、プログラムの詳細な内容や展開方法まで養育者のニーズに応じて修正することが出来た。加えて、このようなアクションを看護職と協同して行ったことは、養育者の日常生活を改善し、自らの能力に気付く機会等となっていた。これは、プログラムの開発から評価までの過程に携わったことが養育者のエンパワメントにつながっていることを示している。参加型アクションリサーチの意義は、ひとつのコミュニティに属する人々の力を集結させてエンパワメントにつなげていくことであるが⁸⁾、これまで子育て支援プログラムの開発を養育者と行うことが養育者のエンパワメントにつながっていることは報告されていない。

多くの場面において養育者は看護職から教わる関係にある。これまでに提供されている子育て支援も、看護職から提供されて終了しており^{4) 11)}、当事者からの声から子育て支援の実践に生かされにくい関係性があった。しかし、本研究では、育児の当事者である養育者の体験を尊重しながら、それに応じた支援のありようを養育者と看護職が共に検討したことで、養育者は自らの経験が役に立っている達成感や自信を抱き、自らの能力に気付く機会になっていた。分娩施設で提供される子育て支援は、顔見知りのスタッフによるものであり安心感が生じ利用しやすい^{4) 5)}と評価されている。そこで、自施設で分娩した養育者と看護職が協働しながら、子育て支援を展開することは、その地域で育児をする養育者のニーズに応じた支援のありようを検討できる点、更に養育者自身のエンパワメントを高める可能性がある点から、育児期までの切れ目のない支援、特に妊娠出産から乳児期までを切れ目なく継続的に支援する上で有用な方略と考えられる。分娩施設によって対象とする妊産褥婦のリスクの程度や地域医療における役割は異なるが、どのような施設においても分娩施設として行い得る、また求められている子育て支援があり、その具体的な内容を検討する上で養育者と看護職が協働することは有用な方略の一つと考えられる。

VI. 今後の課題

本研究を通して、関西圏域の中核都市で乳児を養育する養育者のニーズに基づいた子育て支援プログラムを開発することが出来た。本研究で明らかになった乳児の養育者の抱えるニーズや求める支援は、他の地域にも共通する可能性が高いものであった。そこで、今後は、異なる地域において本子育て支援プログラムを活用し、これらの知見を蓄積しながら、子育て支援プログラムの有用性を検証する必要がある。

VII. 結 論

参加型アクションリサーチの手法を用いて、乳児を育てる養育者と看護職が協同し、養育者のニーズに応じる子育て支援を明らかにした結果、以下の結果を得た。

- ・乳児の養育者には、【子育てをする自らの体験を話したい】、【夫や子どもと出掛けて楽しみたい】などのニーズがあり、養育者同士で思いを共有しながら気軽に看護職に相談できる場、親子で遊べる場、養育者と看護職が妊婦の相談に応じる場の要素を含めた子育て支援プログラムが求められていた。
- ・求められた子育て支援プログラムを提供することで養育者には、【看護職や養育者同志から求める知識や技が得られた】、【自らの育児を省みてエンパワーされた】、【育児の捉え方が変わった】などの反応が見られた。
- ・子育て支援プログラムの開発から評価までの過程に

携わることで養育者には、【日常生活に改善が見られた】、【自らの能力に気付く機会になった】、【育児の多様性を学べた】などの反応が見られていた。

謝 辞

本研究の実施に当たり、ご協力いただきました養育者の皆様、研究協力施設のスタッフの皆様に深く感謝申し上げます。本研究は、兵庫県立大学地域ケア開発研究所および兵庫県立尼崎総合医療センターの連携によるバースセンター構想の研究として行った。

参 考 文 献

- 1) 尼崎市. 尼崎市次世代育成支援対策推進行動計画わいわいキッズプランあまがさき. (オンライン), 入手先<http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/dbps_data/_material_/files/000/000/037/071/honnpn.pdf>, (参照2016-10-1).
- 2) 尼崎市子ども青少年局計画調整課. 平成24年尼崎市地域の子育て力向上等に関する市民意識・実態調査. (オンライン), 入手先<http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/dbps_data/_material_/localhost/sosiki/046/annke-to.pdf>, (参照2014-2-1).
- 3) 安藤知子他. 当院での育児支援活動. アルメイダ医報. 27(2), 2002, 118-120.
- 4) 軽部敬子他. 病院の「子育て支援の会」が母親へ与える影響. 日本看護学会論文集母性看護. 42, 2012, 54-57.
- 5) 野口あけみ他. 産後の母親に対する24時間電話相談の利用状況と課題. 日本看護学会論文集母性看護. 41, 2011, 82-85.
- 6) Polit, D. F. et al. 第11章質的研究のデザインと方法. 看護研究：原理と方法. 近藤潤子監訳. 第2版. 東京都, 医学書院, 2010, 272-273.
- 7) Kemmis, S. et al. 第10章参加型アクション・リサーチ. 質的研究ハンドブック2 卷質的研究の設計と戦略. 平山満義監訳. 京都府, 北大路書房, 2006, 229-264.
- 8) 大木えりか. 参加型アクションリサーチを行う実践研究者の構え：ソーシャルワークの価値に着目して. 中部社会福祉学研究. 3, 2012, 13-22.
- 9) Kemmis, S. et al. The Action Research Planner. third edition. Geelong, Deakin University Press, 1988.
- 10) 冷水豊他. 第1章高齢社会のコミュニティにおけるアクションリサーチとは何か. 高齢社会のアクションリサーチ：新たなコミュニティ創りをめざして. 秋山弘子編. 東京都, 東京大学出版会, 2015, 32-39.
- 11) 神崎初美他. 子育て中の母親のケア能力とセルフヘルプを支える参加型行動研究とその評価. 日本看護学会論文集：地域看護. 40, 2010, 47-49.

Evaluation of Parental Support Nursing Programs Developed with the Parents of Infants — Participatory Action Research Approach —

IWAKUNI Akiko¹⁾, TSUKINOKI Naoko¹⁾, SUGANO Mineko²⁾, OOMAE Yoko²⁾
SAKAI Yoshiko²⁾, TAKEDA Honami²⁾, SAKATA Akiko²⁾, TERASHIMA Chiho²⁾
HAMANO Yuki²⁾, NAKATA Atsuko²⁾, KUROSHIMA Hanae²⁾
KAWAMURA Momoko²⁾, KAWANISHI Takashi²⁾, MATSUMOTO Nami²⁾
OKAMURA Kazuko³⁾, KAWASHITA Nahoko³⁾, AKAMATSU Megumi⁴⁾
KUDO Yoshiko³⁾, YAMAMOTO Aiko⁵⁾

Abstract

[Purpose]

To clarify the parental support requirements by developing, implementing, and evaluating parental support nursing programs (PSNP) through cooperation between the parents of infants and nurses using the participatory action research approach.

[Methods]

Four stages were repeated over two cycles : 1) clarification and analysis of issues among the parents, 2) planning programs to resolve these issues, 3) implementation, and 4) evaluation. The first and second cycles aimed to develop, implement, and evaluate a PSNP draft and revised PSNP. Data consisted of focus group interviews performed in 1), 2), and 4) transcribed verbatim and analyzed in the viewpoints of the factors required in the PSNP and associated responses. The study was approved by the Research Ethics Committee of researchers' institutions.

[Results]

The participants were 54 parents. In the first cycle, “want to talk about my rearing experience” and “want to go out with my child and husband to enjoy” were extracted and led to the implementation of PSNP including factors such as “sharing of thoughts among parents and consult nurses” and “play with own child.” Consequently, “talking as a refresher and stress reliever” and “solutions for difficulties” were extracted. The

-
- 1) Perinatal Nursing Care Research Center, Research Institute of Nursing Care for People and Community, University of Hyogo
 - 2) Hyogo Prefectural Amagasaki General Medical Center
 - 3) Maternity Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo
 - 4) Nursing Course of Kochi Medical School, Kochi University
 - 5) Research Institute of Nursing Care for People and Community, University of Hyogo

improvements “want to receive concrete advice from professionals” and “want to know plays that encourages strong development” were also extracted. In the second cycle, PSNP was revised based on the extracted improvements and included factors such as “sharing of thoughts among parents and consult nurses,” “play with own child,” and “parents and nurses providing consultations for pregnant women”. After the implementation of revised PSNP, “gained the knowledge and skills I needed from parents and nurses,” “was empowered by reflecting my rearing,” and “my way of rearing has changed” were extracted.

[Conclusion]

By implementing a PSNP with the parents’ viewpoints, they gained knowledge, skills, and empowerment leading to changes in their rearing perception.

Key words : Infant ; Parents ; Child-rearing ; Participatory action research approach ; Nursing